

桜花の象

白雲の 龍田の山の 滝の上の 小
 桜の嶺に 咲きををる 桜の花は
 山高み 風し止まねば 春雨の 繼
 ぎてし降れば 秀つ枝は 散り過ぎ
 にけり 下枝に 残れる花は 須臾
 は 散りな乱れそ 草枕 旅行く君
 が 還り来るまで

高橋虫麻呂(巻九—一七四七)

虫麻呂は、右のような龍田越えの歌をうたう。小桜の嶺を覆い尽くして咲きこぼれる桜の風景からうたい出される龍田の桜花は、さまざまに花の象をかえながらも、旅行く君の道行を彩る景としてうたわれている。

だが、その君は歌の前面からやや退



満開の又兵衛桜(宇陀市大宇陀区)

き、むしろ虫麻呂の眼差しは、もつぱら桜の景へと注がれている。爛漫と咲きほこる桜を賛嘆し、やがて散りゆく桜花を哀惜することか、そのまま旅行く君など貴人への称賛と敬慕の情をあらわすようにうたわれているといつてもよい。

旅行く君の往還を桜花で飾ろうというのであれば、次のようにうたつてもよいのではないだろうか。

嬖子らが 挿頭のために 遊士が
 護のためと 敷き坐せる 国のはた
 てに 咲きにける 桜の花の には
 ひはもあな

若宮年魚麻呂(巻八—一四二九)

国の果てにいたるまで、咲き満ちて

いる桜がうたわれている。正客である君を迎えるための桜は、そのような桜でなければならぬ。逆にいうと、桜色にそめられた花筵であつてこそ、宴席に迎える君への称賛となるのである。ところが、虫麻呂は今を盛りと咲きほこる桜の光景をうたっているわけではない。彼の視線は、どこかしら「欠けた桜」に注がれているのである。やがて無惨にも春風によつて吹き散らされ、春雨によつて散り過ぎ、下枝にのみ散り残つた桜に関心を寄せる。冒頭にうたわれる泡立つ溪流をおおうようにして咲きこぼれる桜花の景とは、虫麻呂が眼前の「下枝に 残れる花」を眺め、そこから逆に、盛りの時へと遡上して幻視した桜の光景だったのではないか。

開花から落花までの桜花の盛衰は、わずかな時のずれを生みながら、枝のいたるところでくり返されるのである。おびただしいそうした盛衰の重なりこそ、虫麻呂の歌ごころはひかれたのかも知れない。

(万葉古代学研究所研究員・西地貴子)